

第三章 眞実の自己

一 眞実の自己とは仏教でいう大我なり

いつもいつもお話しいたします事ではありますが、いつも外郭をお話しいたしましたが、本日は少し事実と首っ引でその先の所をお話しいたします。

「眞実の自己」と申しますと、真我または大我ということであります。御列席の皆様の中には「あなたは見ますところ仏教徒のようではありますが、釈尊は無我をお説きになつたではありませんか。その仏教を信奉しておいでのなるあなたが、真我ということをおかしいではありませんか」と言われる方がありませんかと思ひます。けれども「大涅槃經」に、迦葉かしやうという方で、もうだいぶ如来様のお育てを蒙つて菩薩になつておられる方が、ある日釈尊にお尋ねになりました。「一切衆生には我というものありませんか」とお尋ね

になりますと、釈尊はその時お答えになつて、「ウン、在るとも在るとも、仏性は真我である」と申されました。そういったしますと迦葉尊者は顔の色を変えて申されました。「世尊は今まで無我、無我とお説きになりました。私も事実の真相を達観して見ますのに、確かに我などというものはありません。それが事実であります。それを今さら真我とやらいうものがあるとは、けしからんことを承ります」と、幾分気色ばんだ様子で申されました。そういったしますと、釈尊がお答えになつて「大宇宙は一面から見れば、無我と言わねばならないが、また一面から見れば、真我と言わねばならない。真我は元々在るけれども、潜在していて、開発されていなくちはないも同様である」とお説きになりました。これが『大涅槃經』の「如来性品」の第八章に説かれてある所であります。

仏性真我。譬如金剛。不可毀壞。(仏性は真我、譬えば金剛の如し、毀壞すべからず)と説かれてあります。この真我を大我とお説きになつた所もあります。毀ち破ること、毀ち破壊する事ができないから「毀壞すべからず」であります。インドでは毀れないものを金剛石のようだと譬えます。それは大我であります。でありますから私が真我ということをお話しいたしましたしても、非仏教的ではないということになります。

仏教では、それが釈尊の説いたものであるのか、ないのか、仏教であるかないか決定いたしますのに、三通りの条件を具えているかどうかということによつて決めます。

三通りの条件と申しますと、無常と無我と涅槃とであります。これを三法印と申します。それでその三つが具わつておれば仏法であると言われます。このように仏法である条件の一つが無我ということであります。

無我と申しますと、現象我——小我のことに就いていうのでありまして、実在我——大我のことに就いていうのでありません。大我の方は真実の自己であります。真我、本当の我であります。ここで真我と申しますのは先程も申しましたように、実在論上から「真実の」ということであります。価値の上からも真実のといふことができます。「あの人も道案で困った者だったが、近頃は目が覚めて真人間になってくれてうれしい」というように、価値の上からも真実のといふことができます。けれども今ここで申します真実のといふことは実在論上の意味の言葉でありまして、「真実の」とは「いつも変わらぬ在り通しの」という意味であります。禪宗で坐禅を組みますのは、小利口になるためとか、度胸がよくなるためではありません。禅をやりますのは、真実の自己にハッキリ目覚めるため参禅するのであります。

二 生死流転変化する自己 ——小我——

禪宗のお寺に参りますと、禪師様はお尋ねになります。「あなたの名は何とおっしゃいますか」「私の名は笹本と申します」「では、本当のあなたを修行して此処こゝに持つておいでなさい」と申されます。いかがでしょうか。皆様は本当の皆様を御存知でしょうか。こう申しますと、皆様は「此処こゝに居るのが見えないのか」とおっしゃるかも知れません。「あなたはこの私を嘘の私とでもおっしゃるのですか」と言われるかも知れません。

私共はこの身体と、心からできております。私共は人形ではありませんから、身体だけの我々というようなことありません。やはり心があります。でありますから私共はこの身体と心からできていと言わねばな

りません。いかがでしょう、この身体に「真実の」と言われるべき所があるとお考えになりましたか。「真実の」とは「いつも変わらぬ在り通しの」という意味であるということ、先程も申し上げました。皆様はこの私を御覧になる事ができます。十日前に見た笹本と同じ笹本を今日もまた見ているのだとお思いになるのでありませば、それは真つ赤な誤解であります。私は十日前から今までにたびたび風呂に入りました。髭もたびたび剃りました。もちろん皆様は私の身体の内骨まで御覧になっておいでになる訳ではありません。この上皮は垢となって毎日のようにとれます。垢と申しますと、外から付着した塵もありましようが、大部分はこの上皮が剝がれるのであります。この上皮は毎日垢となつてとれ、豚の一部分になつたり、人參になつたり、また土にまみれたりしております。でありますから、今日皆様が御覧になります笹本は新たな笹本であります。

また少し生理学上から申しますと、血液は一番長い道を通りましても、一循環しますのに五六秒時間程しかかかりません。一分間かかりません。また一番短い道を通りますと、一循環しますのに二二秒あまりしかかかりません。

血液の循環は何を意味しているかと申しますと、心臓から出た血液は循環して行く一歩一歩に身体の老廃物を取り入れ、新鮮な栄養分を与え、心臓の所に戻つて来て、それが肺に送られて、一呼吸ごとに排泄され、空气中の酸素を取り入れて新たになりつつあるのであります。すなわち新陳代謝、物質代謝しつつあるのであります。新陳代謝と申しますと、物が代ると申しましても、物質が変化するというのでありません。代るのであります。「先様お代り」と代るのであります。ちょうど水の流れのようなものでありまして、一点

を見ておりますと同じ水を見ているように思われます。けれども事実はその刹那刹那に別の水を見ておるのであります。

ある米国の生理学の大家が言っております所によりますと、こういうふうにして新陳代謝、物質代謝しておよそ七年も経てば、今この刹那にこの身体を構成しているすべての物質は徐々に悉く外へ出てしまつて一代りして、今日の私とは、物質という方から申しますと全く別物であると申します。姿、形は似ていても物質という側から申しますと、いつかしたら私共はすっかり別の物質に代つてしまうということは事実であります。

最近医学士大野康雄さん（現在医学博士）が京都帝大医学部の石川日出鶴丸博士に聞きました所をお話し下さいました。「この身体には新陳代謝しない所がありませんか」と聞かれました。そういたしますと、石川博士が、「そんなものもあるのか」とおっしゃつておられたとのことでありました。医学は年々進歩いたします。私は七年前に学んだ所を申したのでありますが、一番最近の生理学の大家であります石川博士もやはり新陳代謝しない細胞などないと言つておられます。確かにこの身体は私の身体であると思つておりますけれども、身体の上から申しますと「真実の」と言わなければならない。

仏教では「非古新々有」と申します。この身体は古いと言わなければならないではありません。この身体は生まれる十カ月前はまるきりなかつたのであります。また死んで埋めますと、百年も経てば骨の形さえなくなつてしまいます。

九州の八幡の製鉄所などへ参りますと、よく誤つて熔鉱炉の中に人が落ちる事があります。熔鉱炉の中に

落ちますと「アラ」と言う間に一叢の煙がパツと立ちます。その跡を探して見ましても着物の一片さえも見ることができません。私共はまかり間違えば全体がただ一叢の煙となってしまうのであります。私達こうやって相構えておりますが、一叢の白い煙の変形に過ぎません。元来なかつたものであり、またなくなるものであります。実にはかないものと言わねばなりません。

実在論上から申しますと、実はその通りはかないものであります。けれども価値の上から申しますと、段々如来様から御恵みを頂きお育てを蒙ることができると私共信じております。この身体は如来様の御子といわるべき人格を鍛え出して頂く器であります。けれども実在論上より申しますと、衰れはかないものと言わねばなりません。

この身体は確かに我々の身体でありますけれども、この身体は「真実の自己」という条件に合いません。けれども私共は人形ではありませんから心があります。例えばぐつすりと寝込んでおります時、熟睡しております時には布団の中にぬくとみを感じませんが、目が覚めますとそのぬくとみを感じてよい気持になります。抓めれば痛みを感じ、痛みが覚るということがあります。そのように私共には心があると考えられます。ではその心のどれかに「真実の」と言わねばならないかと調べますと、やはりそんなものはありません。心と申しますと、悲しいとかうれしいとかいうのはやはり心の一つであります。でありますから、心が「真実の自己」でありますならば、いつも在り通しの不変のものでありますならば、悲しみ通しに悲しみ、喜び通しに喜んでいなくてはならないはずであります。けれども、事實はそんなことありません。でありますから心も「真実の」ということでできません。

では記憶はどうであろうかと申しますと、心理学の一端でも学んだ者にはおくびにも「在り通しだ」などと言えません。友達の顔を思い出し、お母さんの顔を思い出すことのできるのは記憶があるからであります。けれども友達の顔を思い出す時、思い出すものがなくはない。しかし、思い出した時は、お母さんの顔は心の中に覚つてゐる、すなわちその時は意識であります。覚つてゐる顔は心であります。しかし、思い出されない時は意識ではありません。思い出されない時は大脳皮質にある生理状態として保存されてゐるのであります。思い出した時のほかは現れないのであります。

記憶は不断大脳皮質に、ある生理状態として蔵されてゐると申しましても、美術館などに絵などが蔵されてゐるといふのは違ひます。絵などでありませば、陳列されておりましたも美術館の蔵の中にしまつて置きましても、絵に変わりはありませんけれども、記憶が大脳皮質の生理状態として蔵されてゐるといふのはこれと違ひます。思い出されてゐる時は意識でありますから心であります。けれども大脳皮質にある生理状態として蔵されております時は意識ではありません。でありますから思い出された時、新意識なのであります。でありますから記憶も「いつも変わらぬ在り通しの」といふことでできません。また記憶は大脳皮質にあるのでありますから、大脳皮質を物質の方面から申しますと、七年前と今とは全然別物であります。大脳皮質は新陳代謝し物質代謝して代りに代ります。でありますから、以前はもつとはつきりとまた委細に思い出す事ができたけれども、今ではもうそうはいかないというように変化いたします。

大脳の神経細胞はおよそ五十億あると申します。ちようど鉄板でドレミファの音を出すドレミファというふうにありますように、ドを記憶する細胞があります。これは物質上の方面から申しますと代るものであり

ますが姿、形が似ておりますから、記憶も似ております。例えば傷ができますと、七年八年経つても物質という方面から考えますと、全然別物となつてゐるにもかかわらず、やはり傷が残つてゐるというように細胞の姿、形が似ておりますから記憶も似ております。

ちようどどの板とまた別のどの板とは、それを構成してあります物質は全然別物でありまして、大きさ、形状、密度、品質などが似ておりましたら、両方共ドという音を発します。例えばそのようにドを記憶してあります細胞は物質代謝して代つてしまいますけれども、姿、形等が似ておりますから記憶も似ております。けれども物質が代つてしまうのでありますから、似てはおりまして同じではありません。でありますから記憶は時が経ちますと薄らぐことがあるのであります。

前にははつきりと、また詳しく思い出す事ができよく覚えていたが、今ではもうはつきりと、また詳しく思い出す事ができないというように段々記憶は薄らぐことがあります。記憶は脳皮質に蔵されておりますから、この頭の方にあります視覚中枢を右の方も左の方も一定量毀しますと、眼が見えなくなるばかりでなく、眼によつて得られた過去の記憶知識のすべてが失われます。もう友達の顔も思い出す事もできない。お母さんの顔も思い出す事もできないというように、過去に眼によつて得られた記憶知識の全部が失われてしまいます。

また脳皮質の聴覚中枢を右の方も左の方も一定量毀しますと、音が聞こえなくなるばかりでなく、過去において耳によつて得られた一切の記憶知識が失われてしまいます。もうお母さんの声も思い出す事もできない。驚の声も思い出す事もできません。でありますから記憶知識というも、靈魂というも、これは結局大



眞 秀三先生

脳皮質の外のものではないということになります。

眞秀三先生の「精神密微」という著書の中に「靈魂は神経系統、狭く言えば大脳皮質である」とあります。でありますから、死んで焼けば灰になってしまう。地獄があるうと、極楽があるうと、その地獄や極楽に行くべき自分がないのでありますから、地獄があるうが極楽があるうが、私共にとつては関係も有り得ない。この身体が死んでも死なない自分があつて、それが死んでから後、善因果悪悪因果で、地獄に行つたり極楽に行つたりするなどは、科学も発達しない実験研究もできなかった昔の空想に過ぎないと考えられます。一通り考えました所では、この肉体にも、心にも、記憶にも、「眞実の」と言わるべきものありません。「いつも変わらぬ在り通しの」と言わるべきものありません。このように一通り考えました所を見ますと、どうも唯物論の方が本当であるように思われます。一つも「眞実の自己」と言わるべきものありません。でありますから私共が認めております私共を、仏教では妄我と申します。ただ有るらしく有るに過ぎない。「眞実の」ということできない私共でありますから、そう言われても返す言葉がないと思います。

妄我とは眞我の反対であります。もちろんこれは實在論上から申すのでありまして、価値の上からは別であります。

三 統一的主体としての自己 — 大我 —

一往考えましたところでは、この肉体にも、心にも、記憶にも「眞実の」と言わるべきものありません。「いつも変わらぬ在り通しの」と言わるべきものありません。ただ有るらしく有るに過ぎない。妄我と言われ

でも返す言葉がないのが事実であります。しかし、もう一度念を押して穿鑿せんさくしてみとうございます。

そういたしますと、少し順序を追つて御一緒に考えて行きたいと思ひます。

私共は銘々種々のものが覚る主であります。見れば見えるという事があります。聞けば聞こえるという事があります。この点が木や石と違う処であります。この黒板を叩きましても痛みが黒板に覚ると思へません。私共でありましてもぐつすりとお熟睡しております時には、私共でも布団の中のぬくとみが覚りません。豈たただに木石のみならんやであります。しかし、眼が覚めておれば、私共は種々のことを感ずる、覚るといふ点が木石と違う処であります。

私共は銘々痛みを感ずる主であります。痛みの覚る者であります。私が抓められますと私が痛いのであります。その時は皆様は痛くありません。そうでございますナ。また皆様を抓めますと皆様は痛いのであります。その時は私は痛くありません。そうですナ。そういたしますと、痛みを感ずる主として自分と、自分でないものがある、自他があるということ申すまでもありません。

それからまた進んで考えとうございます。私が今手を叩きます。どうか、前の音と後の音とどちらが大きかったか、小さかったかを比較して頂きとうございます。

（「小さく拍手」しばらく時をおいて「大きく拍手」）

皆様は今、時を異にして二つの音をお聞きになりましたが、皆様は前の音と後の音と比較して「後の音の方が前の音よりも大きかった」と二つの音を聞いて比較し、識別する事ができます。今、この音を二人の人が各々一つずつしか聞かなかつたのでありましたならば、二つの音を比較し「前の音よりも後の音の方が少

し大きかった」などと識別する事できません。そのように時を異にして二つの音を聞いた時、前の音を聞いた主としての皆様が後の音を聞いた主としての皆様と別人でありますならば、当然両方の音を比較し「後の音の方が大きかった」と識別するなどということできませんはずであります。けれども事實は比較する事ができます。「前の音よりも後の音の方が大きかった」と識別する事ができます。何故にこの二つの音を比較して「前の音が小さかった、後の音が大きかった」と聞き分けることができたのでありましようか。それは一人で両方を知っているからであります。もし別人が各々の音を一つずつしか聞かなかつたのでありますならば、一人で両方を知らないからでありますから、両方の音を比較し「どちらが大きかった、小さかった」と識別する事できないはずであります。しかるに事實は比較できるのでありますから、前の音を聞いた皆さんと、後の音を聞いた皆さんとは同一人であると言わねばなりません。別人ではありません。僅かばかりの時間ではありましたが、前の音の聞く主としての皆さんが後の音を聞くまでなくなつたと言えません。でありますから時間が経つてもなくならない皆さんがあると言わねばなりません。

この時間が経つてもなくならない皆様「いつも変わらぬ在り通し」の皆様があつて、前の音を聞き、その前の音を聞いた皆様と同じで、かつ唯一の皆様がなくならずにあつて後の音も聞いたのだと言わない訳にまゐりません。前の音を聞いた皆様と、後の音を聞いた皆様と、同じような二人が別々にある訳ではありません。唯一であります。二つの音を同一人が両方知っていなければ比較する事できない。別人であるならば比較するということできません。前の音を聞いた皆様と、時間は異にし、音は全然別物であつても、後の音を聞いた皆様とは、聞く主という側から見ますと全く同一人であると言わねばなりません。二つが相等しいという

のでありません。全く同一なのであります。one and the sameであります。

二つが相等しいというのではありません。相等しいというのでありますならば、左の人差指と右の人差指とは相等しいのでありますが、この右の人差指が前の音を聞いたといたします。またこの左の人差指が後の音を聞いたといたします。けれども、聞く主が二つ別々でありますから、両方の音を比較する事でできません。でありますから後の音を聞く主としての皆様が、前の音を聞いた主としての皆様と相等しいというのでありません。似ているという次第ではありません。

神経細胞が続いております時、相等しくはありましても、同一ではありません。続いております神経細胞のこちらの端の部分が前の音を聞いて後、他のこの部分が後の音を聞いたといたしましても、二つに切り離してしまえば二つになってしまいます。相等しくはありましても同一ということできません。でありますから、聞く主としての皆様は全く同一のものであり、かつ唯一のものであります。でありますから、前の音と後の音と時間の隔たりはあり、音は全然別物でありますけれども、聞く主という側から申しますと、いつも在り通しの変わることのない自己があると言わねばなりません。

このいつも変わらぬ在り通しの自己、見る主聞く主としての自己を、弁榮聖者は「統一的主体」とお名付けになりました。実にこれはよいお言葉であります。私共にはこの「統一的主体」としての自己があるということを認めない訳にゆきません。

しかるに私共は物質という側から申しますと、私共の身体をはじめ森羅万象は悉くある状態に結び付いた無数の電気微粒に過ぎません。従つてこの身体は唯一のものではなく、ある状態に結び付いた無数の個体で

あります。その一つ一つは別個の個体であり、分散集合できるものであります。日月星辰山川草木も電気微粒より成り立っております。我々の身体に入ってくる栄養分も、出て行く排泄物もまたそうであります。――

故にちょうどこの身体は電気溜のごときものに譬え得られます。電気溜の中へは電気を貯めてまた放出することが出来ます。――この身体が肥えている時には電気微粒の多い時、瘦せた時には電気微粒の少ない時であります。しかもまた、いつも同じ電気微粒がこの身体を造るのでなく、別の電気微粒が次々にこの身体を造り、再び体外に排出されてしまいます。すなわちこの身体はある状態に結合した無数の個体であり、またその個体はいつも同じものでなく、先様お代りと代つて行くものであります。すなわちこの身体の要素は無数のものであり、また代るものであります。でありますから、この身体はただ一つのものでなく、いつも同じものでもないということになります。

また生理学の立場から考えましても同様であります。私共の身体は、およそ四百兆からの細胞によって成り立っております。精神と最も密接な関係にある大脳皮質も、およそ五十億の神経細胞より成っております。多数の個体の集合体であります。やはり唯一のものではありません。また新陳代謝、物質代謝やまざるものであります。すなわちただ一つのものでなく、またいつも同じものでもありません。

普通の見解に従いますと、知る主としての皆様は大脳皮質の神経細胞と言わねばならないと考えられます。しかし、少し事実と首つ引きで考えて見ますと、そんな考えは間違っていることが即座に分かる訳であります。御同様に小学校で教わった事ではありますが、もう一度記憶を新たにしておくことにいたします。そういたしますと、頭の額から後頭部にかけて皮膚を切り、鋸で骨を挽きます。パクツと頭蓋骨を外して一、二枚

の皮をめくりますと、大脳皮質が露出いたします。真中に深い溝があつて左右の両半球に分かれ、下は胼胝体によつて連つている淡灰色の物質であります。顕微鏡で見ますとたくさんの神経細胞より成つており、大脳の表面を蜜柑の皮のように覆つている層であります。「これで大脳皮質と名付ける」と教わつた通りであります。そしてまた「この大脳皮質が私共の精神と最も密接な関係がある」と教わりました。大脳皮質の後の方、すなわち後頭葉視覚中枢を一定量破壊しますと、眼が見えなくなり、同時に眼によつて得た一切の記憶知識を失います。お母さんの顔も思い出せない。紫の色も、黄色も思い出せなくなります。しかし、聞くためには差し支えありませんし、また聞いて得た記憶知識は失いませぬ。また顯顱葉聴覚中枢を一定量破壊いたしますと、耳が聞こえなくなるばかりでなく耳によつて得た一切の記憶知識を失います。もはや驚の声も思い出せないし、お母さんの声も思い出せなくなります。それと同時に物を言う事もできなくなります。それは物を言う事は音を真似るのでありますが、真似らるべき音と記憶がなくなるからであります。これは事実であります。しかしこの場合、見るためには差し支えありませんし、また眼によつて得られた記憶知識は失われませぬ。

かくのごとく脳髓のある部分を破壊しますと、ある種の記憶知識を失います。それ故に大脳皮質は部分部分によつて種々の記憶知識を分担していると言わねばなりません。脳髓の方より申しますと、見る主は後頭葉中枢であり、聞く主は顯顱葉中枢であると言わねばなりません。後頭葉中枢が破壊されましても聞くためには差し支えありません。でありますから脳髓より考えると、理論上見る主と聞く主とは別人であると言わねばなりません。また音でありましても、Aの音を聞く細胞と、Bの音を聞く細胞とは別であると申します。

でありますから私共がもしも物質だけでありますならば、統一などということ有り得ません。けれども心理上の事実は統一があります。

もつとも「統一的主体」としての自己という場合の「統一」ということは、中心に本部があつて、その本部がそれとは別に存在する各部分を統一するという意味ではありません。例えば君主があつて、内閣を支配統一するというのがごときは普通の意味の統一であります。私共が知る主としての自己は統一的主体であるということとは、かくのごとき意味の統一ではありません。

先程から段々お話し申しました通り物質という側から申しますと、私共の身体をはじめ森羅万象は悉くある状態に結び付いた無数の電気微粒であり、無数の個体であります。

また精神の方面から見ましても種々様々の記憶知識があります。義経の事も、弁慶の事も、雄蕊雌蕊の事も、お父さんお母さんの顔も、また自分の村の鎮守の森の佇いも知っております。今思い出し得られる限りにおいても無数と言つても差し支えない程多くの事を知っております。これらは悉く心として浮かび出るものであります。そして義経は弁慶でありません。お父さんの顔はお母さんの顔でありません。でありますから心も一面から言えば種々様々の記憶知識という無数の個体から成っております。

しかし、見る主、聞く主としての自己、知る主、覚る主という側から見ますと、知る主、覚る主は只一つであります。記憶の上で音と色彩とは各々違つた別個のものであります。けれども私共、心理上の事実はどうかと申しますと、音の事を知っている私が色彩の事も知っております。色彩の事を知っている私が物を言うのであります。物を言う私にまた弁慶の事も知っており、弁慶の事を知っている私が義経の事を知っている

のであります。また義経の事を知っている私が雄蕊雌蕊の事も知っているのであります。その雄蕊雌蕊の事を知っている私がイロハも知っており、ABCも知っておるのであります。またそのABCを知っている私が歩きもするのであります。かくのごとく事柄は各々一つ一つの個体であり別々でありますが、各々の事柄を離れて知る主が別に存在するではありません。すなわちABC各々は各々個体であり別々であります。ABCを離れて知る主が別に存在するではありません。Aを知る主としての自己も、Bを知る主としての自己も、Cを知る主としての自己も、同一人でありかつ皆分かつべからざる唯一のものであり、普通の意味の統一と違つております。この心理上の事実は唯物論では説明できません。

一つの音を聞いた記憶の主が他の音をも聞き、また物を見たりするのであります。物質だけであります。ならば、各々分担して音の事、色の事を司っているのでありますから、統一などということないはずであります。神経系統の後頭葉中枢の細胞が破壊されても聞くためには差し支えありません。また顔葉中枢が破壊されても、見るためには何ら差し支えありません。すなわち大脳皮質は局所分担であつて、各中枢は各々独立に活動しています。それでありませうから、一方が破壊されても一方は独立に働きます。しかるに、精神上的の事実は、私の顔を見る主としての皆さんが、また私の声を聞く主でもあります。二人別人ではありません。事実は音の事をも、色の事をも、それを統一している主があります。でありますから「統一的主体」としての自己があるということ認めない訳にゆきません。その大脳皮質を指して統一的主体と申すことができます。でありますから唯物論は成り立ちません。大脳皮質を指して統一的主体と言えないことはウィリアム・ジェームズ (William James 米 1842-1910) 'エボンズハウス (Hermann Ebbinghaus 独 1850

（1909）の心理学を研究なさいますれば明瞭であります。マルクス（Karl Heinrich Marx 歿 1818～83）

のごときは統一的主体に関して認識不足どころの騒ぎではありません。統一的主体に関して認識ゼロであります。一元両面説が正しい説であると言わねばなりません。私共は子供の時からいろいろな記憶があります。記憶には、忘れた記憶というおかしきようであります。それでもやはり記憶の中に入れてあります。私共には子供の時から今まで種々なものを記憶いたしてまいりました。けれども、そのうち今まで記憶してゐるだけでありまして、ほとんど無数ということができます。私共は植物学の事も知っており、地理の事も知っており、歴史の事も知っております。知られる側から申しますと、甲乙丙丁と銘々別々でありますけれども、これを知る主という側から申しますと、全く同一人であります。統一的主体としての自己があります。もしも、この統一的主体としての自己がないならば、何らの学問の体系も可能となりません。時と所とを異にして得られた種々様々の記憶は、思い出されないものもありますが、思い出される限りにおいても無数と言つてもよろしゅうございます。その無数の記憶が皆知る主としての自己に統一されておりますから、動物学、植物学、論理学等々の学問の体系が可能となります。植物学の体系が何故に可能であるかと言いますと、まず植物と名付けらるる一つ一つの物を比較しなければなりません。多くの植物を同一人が知つてゐるのでなくては、比較はできません。種々様々の植物の記憶を思い起こし、異なつた所を捨象し、共通した所を抽象し、そして総合、分類する所に植物学の綱目等が分けられ、体系ができるのであります。只一つの知る主が一切を知るのでなければ、学問の体系は不可能であります。今いくらかの経験によつて、ある考えを立てたといえます。二十年後に別の経験によつて新しい考えを得た時に、後の考えによつて前の考えを訂正

することもできます。しかし、考える主が別人であるならば、後の考えによって前の考えを訂正するということはできないはずであります。大脳皮質は無数の電気微粒であり、しかも新陳代謝、物質代謝止まざるものであります。いつも同じ電気微粒ではなく先様お代りと代つて行く。故に考える主を大脳皮質だと言えませんが。故に少なくとも一生涯を通じて知る主、覚る主としての自己は、唯一のもの、変わらないものであることが分かります。でありますから学問の進歩ということがあるのであります。

これからも、一生を通じて同一の自己が見たり聞いたりすると思われれます。でありますから、将来も学問はますます進歩発達するのであります。前には短期間の隔たりにおいて、前の音と後の音を比較する事ができましたが、十年十五年隔たつてもやはり同じように、以前に聞いた音と、後に聞いた音とを比較する事ができます。また五年前に見たあの家よりも、今日見るこの家の方が大きいとか小さいとかいうように比較する事ができます。でありますから、やはり見る主としての自己、聞く主としての自己は十年前の見る主、聞く主としての自己と同一人であると言わねばなりません。相等しいというのでありません。

いかがでしょうか。皆様は「今音を聞いている自分はたしかに俺であるけれども十年前に音を聞いた自分は俺でない」とおっしゃいますでしょうか。もちろん今申しておりますのは見る主、聞く主という所だけを言っているのであります。十年前の自分と今の自分を比較して、十年前には身体も小さかったし、知識も少なかつたけれども、今は十年前より身体も大きくなっているし、知識から言つても、十年前知らなかつた事も今はたくさん知っている。であるから十年前の自分と現在の自分とは大いに異なるというような、そんな事を言っているではありません。ただ見る主、聞く主としての自分という所だけを考へて頂けばよいの

であります。

いかがでしょうか、「今音を聞き、物を見るのは俺であるけれども、十年十五年前に物を見、音を聞いたのは、あれは俺でない」とおっしゃいますでしょうか。そうはおっしゃらないだろうと思います。

十年十五年前に見聞きした自分がやはり今種々のものを見聞きしているのです。もしも、十年十五年前音を聞き、物を見た自分と、今音を聞き、物を見る自分とが異なっているのです。全然別人でありますならば、二つの音を比較し「前の音の方が後の音よりも大きかった」「小さかった」などと識別する事できませんはずであります。「以前に見たあの家よりも、今見るこの家の方が大きい」などと比較し識別する事できないはずであります。けれども時と所を異にして認識の客は全然別物でありまして、この二つのものを比較し識別する事ができるのが事実であります。でありますから、少なくとも一生を通じて見る主、聞く主としての自己は同一人であると言わねばなりません。

私の小学校時代は寺小屋でありまして、先生が真正面に大きな机を抱えて控えておられ、私共は小さい机を一つずつ持って先生の前に並びました。先生は洋傘の骨で字を指し示して教えて下さいました。時々はツツと頭を洋傘の骨でつつかれた事を記憶しております。およそ四十年前の事です。その四十年五十年前に見る主、聞く主であった私が、今日もやはり見る主、聞く主であり、全く同一人の私であります。五十年六十年経ってもなくならない自己、少なくとも一生涯、ただ一人の自己のあることは確かであります。それでは、今までの所は御異存ないものとしてお聞きいたしとさせていただきます。

統一的主体としての自己はあるにはあるが、けれどもその「統一的主体」は何処どこにありますでしょうか。少な

くとも、今になって「此^{こゝ}処にありますが」と身体を指すことできません。この身体には「真実の」と言われるべき所ありません。身体を構成しております物質という側から申しますと、七年前に身体を構成していた物質は、もう何一つとしてありません。けれども見る主、聞く主としての自己、統一的主体としての自己は十年前の自己と全く同一であります。でありますから見る主、聞く主としての自己、統一的主体としての自己、真実の自己はこの身体がなくなってもなくなるらない自己であると言わねばなりません。この身体であると言えないとすると、一体何処にあるのでありましょうか。もちろん心でも記憶でもないこと明らかであります。私共は統一的主体としての自己があるということは分かりますが、それが何処にあるのか、どんな様子をしていいのか、赤いのか、青いのか、三角であるのか、四角であるのか、丸いのか、平べったいのか、重いのか、軽いのか、柔らかいのか、堅いのか、熱いのか、冷いかさっぱり分かりません。この状態を仏教では「迷い」と申します。

迷っているとは、何も死後「恨めしや」と幽霊になって出る事ではありません。生きていても迷いがある訳であります。しかるに「知る主としての自己は大我であります。それは大宇宙を買っています」と答えられる程のお方ありますならば「眼見る能わず、鼻嗅ぐ能わず、舌味を知る能わず」という経文の一節をその通りその通りと頷かれるであります。そしてまた、そのように大我に目覚められたお方ありますならば「知る主としての自己が何処に在るかなどと、そんな事は言うまでもないではないか。手の音は何処に聞こえているか。手を叩いた所にある。耳の中にあるなどは考えられないではないか」とお答えになるであります。眼がなければ物は見えませんが、眼の中に物は見えてはいない。見らるる物のあるそこに自

分がある。知る主は大我であつて天地を貫いてゐる」と仰せられる程のお方は、このたびの私の話が必要といたしません。実に知る主は大我で、それは大宇宙を貫いています。この大我に目覚めたことを悟りが開けたと申します。

私共はちよどぐつすり寝込んでゐるようなものであります。ぐつすり寝込んでおきますと、自分のある事も覺らない。財産のある事も、妻子のある事も覺りません。例えばそのように私共はぐつすり寝込んでおきますから「眞実の自己」が何処にどうなつてゐるのかも覺りません。この眠りを仏教では無明長夜の眠りと申します。無明と申しますと、お光明の反対であります。如来様のお光明に照らされませんから真つ暗であります。真つ暗でありますから眞実の自己の在所あきさえも覺りません。

お念仏申しますと、如来様のお光明を頂くために覺ります。如来様のお光明が心に頂きますと眞実の自己はハッキリハッキリ目覚めてまいります。私共はちよつと眠る位であります。人にゆすぶられても目が覺めまされども、この眞実の自己はちよつとゆすぶられた位ではなかなか目が覺めません。如来様のお光明に照らされます時、私共の眞実の自己はハッキリハッキリ目覚めてまいります。

眞実の自己にハッキリ目覚めて見ますと、もう大宇宙そっくりが眞実の自己であることに気付きます。今この本堂は電氣の光が十方を照らしておりますから広うございます。もしも電氣を消して真つ暗になると狭うございます。けれども電氣の光が隅から隅まで照らしてありますから広うございます。もつともつと百万燭光もの電氣をつけませば、もつと広く感じます。例えばそのように私共の心は闇でありますから狭うございます。このちよどげな身体が自分であると思つております。けれども如来様の大光明に照らされますと、

実にこの大宇宙が自己であることに気付かせて頂くことができます。これは理屈で申すのではありません。事実を事実の通り申すのであります。

もつとも、ある世界的大哲学者の中には「大宇宙は大我、大いなる我である」と言っている学者もありませんけれども、これは理屈の上で論証したのであります。直接認識の事実となつたのでありません。理屈の上で論証しても、目覚めたる我はやはりこの小なる我であります。でありますからショーペンハウエル (Arthur Schopenhauer 著 1788~1860) などは「大宇宙は大我である」と論証しておきながら、死ぬが死ぬまで「死ぬのが嫌だ、死ぬのが嫌だ」と言っておりました。やはり生死流転の我だけしか目覚めておりませんでした。けれども、如来様のお光明に照らされて大宇宙である大我に目覚めた時は、もう理屈でなく、それが覚めた常平生の自己となりますのであります。真実の自己、大我に目覚めてみますと、もう死ぬなどという嫌な事ありません。実にもうそれは永遠の生命であります。

四 真我の覚醒

この事は後でお話しすべきでありますけれども、ちよつと此処で大我に目覚めた事実就いて、原青民上人のお話をいたしておきとうございます。いつもお話しする事ではありますが、原さんの事は一番私よく知っておりますから、やはり原さんの事実就いてお話しいたしますことにします。

原上人と申しますと、もと浄土教報社の主筆をせられた方で、東京松葉町の正定寺においてになりました。そして原さんは今の大正大学の前々身であります浄土宗大学の初級の時、私と同級クラスでありました。当時宗乘

の教授は加藤秀旭先生でありましたが、原さんは先生から何を言われましても、ただ「分かりません、分かりません」と言っておられました。それで先生の方でも「原は仏教は分からぬ男だ」と決めてしまい、原さんのことを「物理学」と綽名あだ名を付けておられました。けれども浄土宗最高の学校を出ます少し前に原さん肺結核になりました。それで原さんが信じております掛かり付けの医者に見てもらいますと「まあ五年以上は生きられまい」と死の宣告を与えられて、急に死ぬのが恐しく嫌になりました。

皆様でもそうでありましょう。一と思いに死ぬのでありましたならば、それほど苦痛でもありませんかも知れません。しかし、静かに自分の死ぬのを見守って見ているのでは嫌でありましょう。原さんでなくても恐しいでありましょう。原さんは嫌で嫌でたまらなくなつて来ました。しかし、やはりアーメンと言えませぬ。念仏もできない、坐禅もできません。やがて弁栄聖者の御教えを頂くようになりました。さすがの原さんも生き如来様であります弁栄聖者直々の御教えを頂きましたのでありますから、信仰が確立してまいりました。

それで、明治三八年か九年でありました。鎌倉の在の千住院というお寺に籠つてお念仏をなさいました。原さんの御遺稿が菊版程の大ききで二百頁位の本になっております。それを見ますとよく分かりますが、病気のつらいのも我慢して二夜、三夜徹夜してお念仏なされた事もあるようであります。ある夜一心にお念仏を申しながら、自分と自分を取巻いている森羅万象との関係を考えておいでになりました。原さんでありますからそんな事を考えたのでありましょう。物理学と綽名を取る程の人でありますから哲学者であります。でありますから、そんな事を考えながら南無阿弥陀仏くと申しておりました。そういたしますと、忽然と

して何もなくなつてしまいました。自分の叩いております木魚の音も聞こえません。周囲の壁もなければ天井も、畳もありません。透き通つた明るみもありません。色も見えなければ重くもありません。自分の身体すらありません。全く無一物となつてしまつて、ただ在るのはハッキリハッキリがあるだけであります。それは筆や言葉では到底言い表わすことができません。形もなければ色もない。あるいは音や、香や、硬さ、柔らかさ、暖かさ、冷たさというようなものありません。何もなくなつたということは、その意味で申します。そして、その状態を強いて形容するならばただハッキリと目覚めているということが出来ます。

それではお念仏申しながら、自分と周囲との關係に就いて考えている間にぐつすり寝込んでしまつたのかと申しますと、決してそうではありません。ハッキリハッキリと目覚めております。それでは色もなく、音もなく、臭もなく、西もなく、重くも、軽くもないというのは何が何だか訳の分からぬものかと申しますと、訳の分からぬどころか、何がハッキリしているといつても、こんなにハッキリしたものはありません。何が確實だといつてもこんな確實なものはありません。しかし、やがて常平生の我に返りましたので、その夜はそれで寝てしまいました。

ところが原上人、翌日朝目が覚めて庭から外を方々見ますと、変で変で仕方がありません。それこそ手足でも抓めつて見たであります。何が変かと申しますと、昨日まで感じておつた自分と森羅万象との關係が一変してあります。昨日までは森羅万象は自分の外のものとして見えておりました。山川草木、日月星辰、人畜虫魚すべては自分の外に見えておりました。ところが今申しました通り今日は森羅万象一切は自分の内に見えているのであります。

原さんはその朝から一切が自分の心であり、一切の活動が自分の心の働きであると思われて来ました。そしてその次の日も、やはりその通りでありました。それで原さんもう落ち着くことが出来ました。ちょうど我々が種々のものが自分の外に見え、また聞こえたりすることを少しも問題にする人ありません。「ハテ、何故種々の物が自分の外に見え、また聞こえたりするのであるか」と、不思議に思う人ありません。平氣の平座であります。それを当り前の事として、それで落ち着いております。そのように原さんは一切のものがすべて自己心中のものと感じられている。それでも落ち着くことが出来ました。

私共は一切のものが自分の外に見えている「ハテ、何故であるか」と不思議に思う人ありません。けれども、事實はすべてのものは外に見えることが不思議に思われぬ方が不思議であります。精神物理学を少しでも学びますと——精神物理学と申しますと、精神と大脳皮質との関係を研究する学問であります——この精神物理学を少しでも学びますと、すべてのものが外に見えるなどということ言えません。

私共が旅行をいたします時、種々の精神的写真を撮って参ります。日光の陽明門の事を家に帰って参りまして思い出す事ができます。陽明門の事を思い出すと、結構な陽明門が彷彿として浮かんでまいります。ちょうど写真を撮りますと、写真機の中のフィルムの所に写りますように、すべてのものは頭の中に見え、頭の中に聞こえるはずであります。それでありましたのに「黒板は自分の外に見えている、（黒板を指差されて）一体何故であろうか」と不思議に思わぬのがむしろ不思議であります。これはあるとんでもない間違いを我々がしておりますから、そのように思われるのであります。

原さんはそのようにして、一切が自分の内のものと見えておりました。しかし、もうその時の自己は今ま

での自分と想っていたようなちっぽけな小我ではなく、大宇宙を我とする大我が常平生の目覚めたる自己となっておりました。そして原さんが付きました。「もう自分は死なないものである」ということがハッキリ分かり、原さんは天に歎び地に喜んだということであります。歎天喜地したと申します。理屈を申ししているではありません。事実をその通り申ししているのであります。

哲学者は理屈で「大宇宙は大我である」と申ししております。東京帝大の教授であります医学部生理学講座担任の医学博士永井潜先生がだいぶ以前に「生物学と哲学との境」というだいぶ大きな著述を出されました。私、一読して大変うれしく感じました。生物学の博士などというものは唯物論を説くものだろうと思っておりますと、案に相違してその中には古今の哲学を批評して、その中に「唯物論のごときは間違いきつた愚論だ」といった意味のことが書いてある最後に、永井博士御自身の説を述べられておられます。それによりまして、「大宇宙は大きい我である。そしてその大我の一面を見れば物質であり、他の一面を見れば精神である。それ故、物質と精神とは全く一元である」と説かれてあります。本当に大宇宙は大きな我である、と言っておられます。けれども、これは理屈の上から言っているのであります。

宗教的修行をしますと、理屈ではなく事実上ハッキリと目覚めるのであります。目覚めて見ますと、哲学者が言ったことは嘘ではなかった、事実であったと気が付いてまいります。

原さんは如来様の大慈悲によって大宇宙を自己とされた方であります。この処を禪では解脱と言います。私共は生死に束縛されております。死に対しては何らの自由を持ちませんが、この束縛が解かれ、もぬけたことを禪では心身脱落とも出離生死、解脱名色なども名付けます。

鉄眼禪師はこのことを「さまざまの差別形はあるに任かせてただ平等にして一味なり」と言っておられます。物質代謝、新陳代謝、変化極まりない心身が脱落した所はただ平等にして一味、本来無一物、本来無東西であります。身も心も存するままで、しかも認識が平等一味の大我にだけ働く状態であります。その状態は知らるるものという方の認識の客はなくなり、全く知る主となった処であります。種々の言葉をもつてこの大我のことを説いてありますが、それはまた後に申し上げることいたします。

五 修行の目的

修行の目的に就いて申しますと、達磨大師は九年間壁に向かつて坐禅していたと申しますと、「どうも馬鹿な事をしたものだ。それよりも道に落ちている尖った石でも道の隅にのけた方がよっぽど意義がある。自動車パンクしないですむから」と申します。けれども、これは修行の目的を知らないから、こんなことを言うのであります。大我に一度目覚めることができせば、もう生まれ変わり死に変わりするなどという愚かな事はもういたしません。

学問でありまして、やっと物事が少し分かるようになったと思ひましても、もう何もかも捨てて一人死んで行かなくてはならない時がきつとやつてまいります。でも後の人が継ぐではないかと言うかも知れません。けれども、そのうちに地球が亡びる時がまいります。いつまで続く事でありましょうか。

たくさん金を作り、立派な家を建てて、俺の家だなどと威張つていても一切を捨てて墓の主となる時がきつとやつて来る。いつまでもく彫刻や絵画を業しんでいる事はできません。またいつまでも歌を詠んでい

る事でできません。

そういう訳であつて、もうたくさんの金を積んでも、すべてを捨てて墓の主となる時がやって来る。夜の寝覚めにも知恵を絞り、宮々々々として働いても、一切を捨てて墓の主となることが間違ひなくやって来る。人によりますと「死にたくない、死にたくない」と言つて空を握つて、目をむいて、もがきにもがいて死んで行くような人もあります。この世になごりがおしいであります。死ぬという不完全な事があるばかりに、私共は徹底的な満足が得られません。いつもノホホンとしていて、いざという時になりますと、周章狼狽。

先年お隠れになりました日本一流の富豪、八十幾つかでお隠れになりました。その晩年に就きまして、その傍にいたある人の話によりますと、病氣になりました、そうしますと一枚何千円、何百円も出してもなかなか得られないという書画を、ベタベタと壁に張つて見ておつたというのであります。

さるお方がお見舞に行かれ、驚いて「あんた、もつたいない事をなさいますね。これは何百円も出さなくちゃ買えないじゃありませんか。こういう貴重品をベタベタ壁に張つて見ているなんて、よくそんなもつたいない事をなさいますね」と申しますと、その富豪の申しますには「ウン、そうだ。いかにも何百円で買ったよ。けれども俺も、もう八十を越えて、いつまでも見る事できない。癩に障つてたまらないから、張つて見てやるんだ」実にもう、お気の毒な寂しいお言葉でございます。飛ぶ鳥をも落とすほどの勢いで何百人、何千人もの人からペコペコと頭を下げられる程の人でも、一切を捨ててゆく時がいつかしらん、きつとやって来る。死ぬという不完全なことがあるばつかりに、私共は徹底的な満足を得られません。

実に釈尊は、そこに不安をお感じになつたのでありました。インドはその当時、地図を見ますと舌のような形をして、十六カ国に分かれておりました。釈尊はその中のマガダ国の太子としてお生まれになり、やがて国王たるべき御身分であらせられました。

しかしながらある日、一つの門から散歩に出られますと、道にトボトボと杖をついて歩いてゐる腰の曲つた老人を御覧になりました。実にもう弱々しい有様であります。釈尊はその弱々しい老人の様子を御覧になりまして、何人もやがてはこのような頼りない姿になるに相違ないとお考えになり、釈尊はもう散歩をする勇氣もなくなつて、宮中にお引き返しになりました。

またある日、他の門から散歩をなさいました時に、路傍で大変苦しんでゐる病人を御覧になりました。実に人間というものは弱い情けないものだ。何人もいつかしらんこういう苦痛に遭わねばならない、とお考えになつて、もう散歩をする勇氣もなくなつて、宮中にお引き返しになりました。

それからまたある日、他の門から散歩において死んだ人を御覧になりました。釈尊は何人もあのような運命を逃れることはできない。実に人間というものははかないものだとお考えになりました。そしてもう散歩する勇氣もなくなつて、宮中にお引き返しになりました。

それからまたある日、他の門から散歩にお出かけになりました。そして途中一人の修行僧にお遇いになりました。そして人生にはこういう生き方もあるものだということをお知りになりました。そして釈尊自身も「どうかして、修行する事によつて、生き通しの生命、八風に悩まされることのない平和を得られるものならば得たいものだ」とお考えになり、やがて国王たるべき御身分を捨て、一夜宮中を抜け出で、金の冠も身に

装った玉の飾もかなぐり捨てて馬に積んで送り返しになり、御自分はそのらに落ちている檻ぼろを纏うて、食物を得るために心を煩わす事のないように、乞食生活こっしきをして、永遠の生命を得る道を専心に求められました。これが有名な「四門遊観」であります。

涅槃とは生き通しの生命と、永遠を貫く安らかさと、喜びとであること申すまでもありません。この涅槃を得たいために釈尊はやがて国王たるべき御身分を捨て、一心に修行を遊ばされました。そしてすっかり得られたその喜びを私共にお頒ちになるために、五十年間懇ろに御説法なさって下さいました。

私共は大我に目覚めませんと、生き通しの生命は決して得られません。達磨大師が面壁九年されて大我に目覚め修行成就して、また他にその喜びを頒とうとしてお示し遊ばされました。一心に修行して大我に目覚めめすと、大宇宙が自己の内ものものとなってまいります。現在そういうふうになっておられる方が御列席の中であろうと思われまます。私も処々方々回っておりますうちに、段々とこの永遠の生命を得ておいでになる方にお目に掛かります。原さんもいつもいつもしっかり大我を得ておられました。

こういうように、大宇宙を自己としておられる方が段々とおいでになります。理屈ではありませんです。如来様のお光明を心に頂きますと、もう嫌な死ぬという事がなくなつてまいります。でありますから極楽であります。如来様のお光明に照らされますと、実にのどかな心になってまいります。永遠死ぬ事のない命と、いつどんな事に遭つても動ずることのないのどかな、平和な心に充ち満たされてまいります。でありますから極楽と申します。どなた様も一心にお念仏いたしますとそうなります。修行をすれば、このような大我に目覚めることができるのであります。この大我に目覚めるためには宗教が必要となつてまいります。理性が

なければ教育は不必要であります。道理も不必要であります。食うために宗教を要する訳ではありません。食うだけでよいならば、犬、猫と違わない訳であります。いかがでありましょうか。やはり道に落ちている尖った石をわきにのけた方が意義がありませんか。「黙々として壁に向かつて九年間も坐禅しているなんて、そんな馬鹿な事をやっているよりは、道に落ちている尖った石の一つもどけた方が意義がある」などと言いますのは、修行の目的を知らないからであります。